

# 更生への道

## 孤立させず 雇い守る

### 4 支え

「財布落しました」。  
毎週のようにアキラ(仮名)から電話で聞かされた。遊ぶ力ネが尽きて給料を前借りしたい時につく、幼稚なうそ。そうと分かっているがら心じてきた草刈健太郎(四郎)は、二十三歳になったアキラと酒を飲み、笑い話にする。「何度、おまえを諦めかけたか」  
草刈は建設会社「カンサイ建築工業」(大阪府)の社長。罪を犯した若者を雇う活動に知人の勧めで参加して、十八歳だったアキラを塗装作業員として二〇二三年に雇用した。中学時代から万引や店舗荒らしを繰り返して、少年院を出たばかりだった。

現場。アキラは、一カ月で仕事に来なくなった。寮から姿を消し、電話にも出ない。現場から「なぜ、あんなヤツを雇ったんだ」と非難の声。一カ月後、アキラは悪びれもせず、給料をもらいに会社へ来た。  
その後も続く前借りと無断欠勤、うそを重ねる。休み。なぜ周囲を裏切るのか理解できない草刈は、アキラを焼き肉店に誘った。二人で、本気で向き合った。アキラは生い立ちを語り始めた。



少年院出身のアキラ(左)と語り合う草刈。何度も裏切られたが、アキラを見捨てなかった＝大阪市内

「両親はアキラに無関心で、幼い頃から褒めも叱りもしなかった。食事は作ってくれず、カップラーメンで空腹を満たした。誕生日を祝ってもらった記憶はない。深夜徘徊で警察に捕縛されても、迎えに来なかった。人を信じることなく育ったから、草刈に「愛情が、〇五年に留学先の米国で殺された。「遺族」になった草刈は現地に飛んで裁判を傍聴し、犯人の男を殺したいほど憎んだ。  
その経験から「犯罪者は世の中から消えればいい」とまで考えていたが、アキラの過去を知り「彼も社会の被害者かもしれない」と思うようになった。「善悪の判断や人の思いを知らずに育った。彼だけが悪いわけじゃない」  
雇ってから一年後。アキラが大麻所持の疑いで警察に聴取され、少年審判を受けることになった。草刈は、一度は「少年院に戻って反省しろ」と突き放したが、審判で裁判官に訴えた。「私が責任を取る。もう一度、チャンスを与えてください」。予想外の言葉に、アキラは椅子に座ってうつむいたまま涙を流した。言い渡されたのは少年院送致ではなく、社会で経過を見守る「試験観察」だ

それ以来、アキラは必死に働き続けている。現場から「彼がないと困る」と聞こえてくるのが、草刈はうれしい。これまで少年院や刑務所を出た十五人を雇った。定着したのは五人だけだが「誰も面倒を見ないような難しい人ほど、雇うことに意味がある」と言う。  
先日、草刈は少年院へ講話に向き、支える側の思いを語った。その場で元非行少年の一人が「雇ってほしい。更生したい」と申し出た。すぐに面接すると、親が事件を起し、親戚を転々として育った過去を泣いて打ち明けた。草刈は、うなずいた。「おまえも大変だったな」  
社会に戻っても大人の支えがなければ、挫折するかもしれない。「もう孤立させてはいけない」。彼が少年院を出たら、草刈は自分の会社に迎え入れる。  
(敬称略)